

## 西尾城の歴史

承久の乱(1221年)の戦功により、三河国の守護に任じられた足利義氏(のちの吉良氏)が築城した西条城が始まりと伝えられている。

戦国時代、弘治3年(1557)頃の西尾地域(吉良荘)は、それまでの吉良氏にかわり、今川氏が駿河・遠江・三河を治めていたが、永禄3年(1560)5月、今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に敗れると、徳川家康(当時は松平元康)はこれまで従っていた今川氏から離れ三河統一へと動き出す。

永禄4年(1561)吉良荘東条にて家康と今川方の吉良義昭との間で軍事衝突がおこり、家康は5月末に今川方の牧野成定の西尾城と今川方の吉良義昭が守る東条城を攻め落とし、西尾城には酒井政家(正親)初代西尾城主とし、東条城には松井忠次を配した。

西尾地域を支配することになった家康は、地元の武士や康全寺などの寺院へ領知・寺領安堵の判物を出すなど地域の安定に努め領内の整備も進めた。また鷹狩を愛ししばしば西尾・吉良を訪れていた。鷹狩のほかにも嫡子信康の大浜追放の際に西尾に来て康全寺に陣を置いている。西尾地域は永禄4年に徳川領となり、家康はたびたびこの地域を訪れ親しまれた場所といえる。

関ヶ原の戦い後の慶長6年(1601)には本多康俊が西尾2万石の藩主として入り、その後も譜代大名が藩主を務めた。寛永15年(1638)太田資宗が西尾城の大改修をし、堀と土塁が城下町を囲む「総構え」を企て、井伊直之が工事を受け継ぎ明暦3年1657に完成した。明和元年(1764)に大給松平氏が6万石の藩主として入城以来、廃藩まで5代続く。

西尾城跡一帯は平成8年3月に本丸丑寅櫓・鍬石門などが再建され、西尾市歴史公園として整備された。また同26年3月に天守台などを復元し、令和2年に二之丸丑寅櫓及び屏風折れの土塀が完成した。

## 西尾城の特徴

西尾城は外郭の城下町まで含めると南北約 1 キロにも及ぶ大きな城であり、明治初期の廃城後に建物は壊され、堀は埋められたが市内の各所に城の遺構を見ることができる。

主な特徴は①二の丸に天守があったこと。②堀に中島があったこと。③城下町を堀と土塁で囲む惣構えになっていたこと。

西尾城は全国で唯一、二の丸に天守を持つ城である。西尾城では、天守の他に三重櫓 2 基、二重櫓が 10 基も建てられていた。特に三重櫓が天守の他に 2 基もある城は譜代大名の城としては珍しく、多くの櫓が林立する近世城郭であった。西尾城の縄張は梯郭式で、台地の端に本丸と二之丸を配置して、本丸の前には馬出である姫丸を築き、その外に北之丸、東之丸を築き、更にその外に三之丸と帯曲輪を築いている。その外にある城下町を堀と土塁で囲む惣構えになっていた。惣構えには 5 つの門があったが、三之丸は大手門と新門の 2 つ、東之丸には太鼓門が 1 つと、本丸に近くになるにつれて門の数が減り、防備が厚くなる求心的な縄張となっている。

## 御劔八幡宮

西尾城内にある御劔八幡宮(みつるぎはちまんぐう)の創建は古く、文徳天皇(もんとくてんのう)の時代(850~58)の時代といわれ、最初は現在の西尾市山下町東八幡山あたりにあったそうです。それを後の承久年中(1219~22)に三河国守護に任じられた足利義氏が、西条城(西尾城)を築城する時に現在の場所に移しました。そして源家に伝わる宝劔・髭切丸(ひげきりまる)と白旗一流を納めたといわれています。戦国時代の永禄七年(1564)には、城主・酒井政家が鰐口を寄進しており、銘文に「西尾」の地名を使用した最古のものということで、西尾市の文化財に指定されています。また江戸時代を通して歴代の城主が手厚く保護し、現在の本殿と拝殿は延宝六年(1678)に当時の西尾城主・土井利長が再建したもので、これも西尾市の指定文化財です。

## 旧近衛邸

江戸時代の建物で、数寄屋造りの書院と茶室から成る。藤原摂関家筆頭として左大臣を務めた近衛忠房に嫁いだ夫人の縁で薩摩藩島津家によって建築。その後小松宮彰仁親王らの別邸として使用されたのち天理教京都河原町大教会の手に渡る。昭和60年神殿改築にともない壊されることになり、西尾文化協会が西尾市への建物移転を計画し、自費で部材を解体移送し西尾市に寄贈しました。平成7年3月に歴史公園づくりの一環として完成。抹茶サービス有料が受けられる。

## 鍬石門

西尾城の鍬石門(ちゅうじゃくもん)は、城主の居所である二之丸御殿に至る表門。当時は貴重だった真鍬(しんちゅう)の飾りが多く使われていたので名付けられた。現在も西尾城の入口門みたいな役割です。

## 天守台

天守台の石垣の石は、幡豆石(はずいし)といわれるもので、西尾市南部で採掘された石です。この幡豆石は天守を築く石として優れている様で、古くは加藤清正が名古屋城大天守の石垣を築く時、篠島という離島から運んだことが分かっています。そして現在では静岡県掛川市にある掛川城の天守台の石垣も、一部幡豆石を使っており、石垣に適している石という事が分かります。

## 尚古荘

昭和初期に米穀商の大黒屋岩崎明三郎により建てられた邸宅。城郭の入口であった新門や内堀の一部と東之丸丑寅櫓など西尾城の遺構を活用した庭園。西尾城への想いから尚古荘(古をしのが荘)と命名された。

## 東向寺

東向寺は愛知県西尾市駒場町にある寺院で、桶狭間合戦で討死した今川義元の首塚があります。

東光寺の創建は平安時代初期の貞観年間(859~877)、円仁(慈覚大師)によるとされ、創建当初は天台宗でした。その後一時荒廃したものの、室町時代後期の明応年間(1492~1501)中島崇福寺開山天祐上人の弟子・光祐慧徳上人が入り、浄土宗に改めました。現在は浄土宗西山深草派。

第四世の徳順上人は、今川義元の叔父と伝えられ、甥の義元は深く帰依して供田を寄せたり、禁制を出したりしていたといわれています。永禄三年5月19日(1560年6月12日)、今川義元は桶狭間合戦で織田信長に敗れ、討ち取られた義元の首は須ヶ口(現在の清須市)に晒されました。その後、鳴海城を守っていた今川軍の武将・岡部元信が鳴海城と引き換えに主君である義元の首を返却され、駿河に帰ろうとしますがなにせ初夏という事で首の傷みが激しく、今川家ゆかりの東光寺に義元の首と戦死者を埋葬したといわれています。

## 康全寺

応永5年(1398)城内の御剣八幡宮の近くにあった八幡六坊のうち釈迦堂と大日堂を移し、吉良山満全寺とし、異国僧劫外乗空禅師が復興した。当時吉良荘の領主であった吉良氏も深く帰依していたという。

天正9年(1581)酒井重忠の城主時代、徳川家康が村巡見の途中にこの寺に泊まった折に、家康から一字をもらい、西尾山康全寺と改めたという。同13年、西尾城拡張の際に現在地に移し、鎮城の禅寺としたと伝えられる。

## 肴町通り・順海町

市内で一番城下町のたたずまいが残っている場所。肴町通りは城内の消費生活を支える日用品が商いされる商店街であった。伊文神社の祇園祭の練り物の一つ大名行列が7月に開催される。順海町通りは天王町から肴町へぬける小径です。順海町の地名の由来は、唯方寺の和尚順海がこの道を開いたことによると伝えられている。